第45回社会思想史学会大会　自由論題報告「野上弥生子の女性啓蒙論」

司会：北海道大学　水溜真由美

　　　　　　　　　　　　　　　　　　報告：東京外国語大学博士後期課程　岩瀬みゆき

本報告は、作家として名高い野上弥生子(一八八五－一九八五年)の著作のうち、女性読者の啓蒙を意図して執筆された論評に焦点をあてる。これらの「女性啓蒙論」は一九三〇年代から一九五〇年代まで継続して執筆され、発表媒体は主に女性誌で、『婦人公論』を中心に発表された。野上は知的世界で指導的な立場を持つことに価値を置いており、執筆した女性啓蒙論の数も多く、それらの議論を通して、同時代の日本社会や女性に対する野上の問題意識を探ることができよう。戦前期、日中戦争期、戦後の女性啓蒙論に共通する特色は、成長と進歩、近代化、戦争と平和の問題への関心である。対米英蘭戦期の議論はこうした議論からは断絶しており、そこでは、日本女性の義務として、戦時体制への協力と大東亜共栄圏の女性たちの指導が説かれた。

　成長と進歩をめぐる議論の内容は、戦前から戦後まで一貫しているが、近代化に関する戦後の議論は、社会状況の変化を反映し、戦前期、日中戦争期に比較すればより実践的な内容へと変化した。戦後、女性が選挙権を獲得し、政治に影響を与える存在になったことは、女性を啓発することへの切実さを増大させたと思われる。また、野上は戦前期から戦争否定、平和維持を主張したが、戦後の議論では、アジア・太平洋戦争の体験と肉親に対する本然的な愛情に着目し、戦争否定、平和維持への希求を女性全体の意思として表明した。このような女性啓蒙論の根底には、知的向上の達成という野上の生涯にわたる関心事があり、知識人と「一般」を二項対立的に捉える、教養主義的な発想が見出せる。野上は女性には指導、指導者が必要だと考えていたが、女性が指導しうる存在であるならば、適切な指導が行われることで、よりよい社会が構築される可能性が生まれる。女性啓蒙論には、野上の女性への不信と期待、この相反する感情を見出すことができよう。

本報告に対して、一名の方から以下二点の質問をいただいた。先ず『婦人公論』執筆者の中での野上の位置づけと主張の独自性、次いで、フェミニズムの定義及び野上の女性啓蒙論とフェミニズムとの関連性についてである。『婦人公論』の執筆者としての野上は、戦後初期から一九五〇年代半ばまでの約十年間を見てみると、一年間にほぼ一回のペースで『婦人公論』に登場し、さらに一九五二年から一九五七年までの五年間、毎号の巻頭言を担当した。そして、野上に依頼されたのは、識者よる『婦人公論』の権威付け、もしくは同時代的な関心を集めていた主題についての論評、随筆であった。こうした点に、『婦人公論』の野上に対する信頼、期待の大きさが窺えよう。野上の主張の独自性は、例えば皇太子の結婚を扱った「皇太子のご成婚に思う」に明らかに見て取れる。

野上の女性啓蒙論とフェミニズムとの関連性であるが、戦後初期の女性啓蒙論は社会と家庭の民主化、教育の機会均等を主張しており、公的領域における男女平等を求めた「第一波フェミニズム」、男女の役割分担などの私的領域に光を当てた、一九六〇年代後半に始まった「ウーマンリブ」運動を画期とする「第二波フェミニズム」、どちらの問題領域についても意識している。しかし野上は同時に、家庭のなかで生活しながら、自らの成長や進歩を目指す女性を高く評価し、あるいは一九七〇年代の対談では、ウーマンリブ運動に対して冷ややかな態度を示す。野上の女性啓蒙論は、男女の性別役割分担を構造化しており、そこにフェミニズム的な主張と重なる側面が見受けられるのは、近代主義への志向性に由来するものであろう。